# 万国共通語とバイリンガリズム

野口　メアリー

おきての書、『キタビ・アグダス』で、バハオラは「地球上のすべての人々が使える一つの言語の選択と、共通の文字の採用」を命じている。

この論文の目的は、こうした万国共通語の採用と使用がもたらすと考えられる社会的、心理的な効用を、特に最近のバイリンガリズムの研究を生かしながら、検討することにある。本論に入る前に、バイリンガリズムを簡単に説明し、定義したい。

一般的に、バイリンガルであるというのは、二つの言語を完璧に操れることと考えられているようだが、まず、一つの言語でも完璧にマスターすることは不可能であることを指摘しておきたい。また、二つの言語を用いる場合、学んだ場面、年齢などの差によって、ある分野では一方の言語が使いやすいのに、別な分野では、他方の言語の方が使いやすいという現象がある。それ故、バイリンガルといっても、その二つの言語を使う能力、使い分け、また、二言語間の相互妨害作用などの条件があるので、言語学者の間には、バイリンガルの定義は様々ある。この論では、W．F．マッキー氏が１９６８年に提案した、「バイリンガリズムは、単に、二つ以上の言語を交互に使うこと」というものを、その定義とする。

こうしたバイリンガリズムは、万国共通語と全く関係ないように思われるかも知れないが、バハオラの長男で、バハオラ自身が任命された解釈者であるアブドル・バハは、万国共通語の制度を、１９１２年にパリで以下のように説明している。

「世界平和へ至る道の重要なるものの一つは、一つの国際語を制定することである。
バハウラは、人類の僕たちよ相集まれ、しかして現存する言語のうちの一つを選ぶか、さもなくば、一つの新たなる言語をつくるべし、と、命じた。これは四十年前「アグダスの書」 ― the Kitab-i-Aqdas ― に書かれている。。。。一つの国際語があるならば、あらゆる民族との交わりが可能となるに違いない。こうなると、母国語と国際語との二つだけを知れば用は足りることになる。そして、後者の国際語を使えば、世界中のどんな人でも文通ができるに違いない。
これらの二つの言語を知ればもはや第三の言語は必要なくなってくる。あらゆる人種、あらゆる国の人たちとの会話に通訳の必要がないということは、実に重宝な、心安まる思いがする。」　（『パリでのアブドル・バハの講話集』、２２１－２２２頁）

この説明によると、バハオラの命じた万国共通語の理念には、母語の放棄は含まれていない。国際語を学校で学びながら、母語を保つことになる。この意味で、バハイは、それを「万国補助語」とも呼んでいる。そして、この制度を採用すれば、世界のすべての人々はバイリンガルになることになる。

万国共通語の利点の中には、社会において、現在行われている翻訳と通訳の殆どが不必要になるので、大きな経費節約の可能性がある。しかしながら、その節約が実現されるまで、世界のすべての人々に国際語を教えなければならず、そのために大きな支出が見込まれる。同じように、個人にとって、国際語は、世界中の人々と直接対話や文通ができる手段となる

が、そうするためには、個人が国際語を学ばなければならない。こうして、国際語の利点を現実のものとするためには、多少とも犠牲が必要になってくる。

以上のような利点にもかかわらず、現在では、バイリンガルは、高い社会的評価を得ていない。なぜなら、殆どの場合、バイリンガルになる理由は、移民などの理由で、他の言語を使う民族に接し、その言語を経済的な理由から覚えなければならないという必要性に求められよう。こういった状況が長く続くと、少数民族の中には自分達の母語を忘れてしまうものも多く現れてくる。在日韓国人はこの例に当てはまると考えられる。また、多数民族が支配する政府は、国家意識を強化するため、言語の使用を制限することがある。日本の、明治維新以来続くアイヌ人、アイヌ語に対する政策は、この一例である。

その結果、言語は消滅してしまうことがある。マサチュセッツ工業大学の言語学者の研究によると、世界に現存する６、０００の言語の内、３、０００は、話せる子供が一人もいないので、消滅する運命にあるという。

しかし、言語がなくなると、それに秘められていた生活の知恵までなくなる。薬草、農業法、地域の環境などについての様々な知識・知恵は、将来に渡って保持されることなく、人類の記憶の彼方へと消えて行くことになる。この知識を人類のために保持するには、あらゆる文化を正当に評価できる社会を築く必要がある。まず、万国共通語を採用すれば、少数民族の言葉の存在が世界融合の妨害にはならなくなるであろう。また、バハイの理念である「多様性の間の和合」が普及すれば、若者の間でも、少数民族の言葉の使用は、恥じではなく、誇りとして考えられるようになると判断される。

最近の研究の結果、バイリンガリズムについての、もう一つの利点として、二つの言語を使うことは、想像力と知性を一層柔軟なものにし、知能の向上を促すということが指摘できようが、これは、この分野の概説書である『バイリンガリズムとバイリンガリティ』という書物の教えるところである。

こうして、国際語の応用は、短期的には、多少の犠牲を伴うが、長期的には、人類にとっては偉大な恩恵をもたらす知恵の保持と、個人にとっては自尊心と知能の向上をはかることにつながるものと判断される。